

ロンドンの桜と April Fools



廣田篤彦

今年の春にロンドンに滞在する機会があった。この時期に行くのは久しぶりだったが、春の美しさが印象に残った。街路樹の葉の大きさや、緑の色調の変化を見上げて楽しむだけでなく、意外なほど多くの桜を見ることができた。日本の桜の名所のような圧倒的な存在感は望むべくもないが、ソメイヨシノ、山桜、八重桜が同時に咲き、満開の桜と花壇のチューリップやヒヤシンスと一緒に眺められる贅沢さに、英国が北国であることを思った。

花々の美しさとは対照的に、Brexitを巡る政治の混乱は目を覆うばかりだったが、各紙がこの問題を報じる際の辛辣な表現にいかにも英語らしいものがあり、大変興味深かった。4月2日の*The i*紙の一面に躍ったのは、April Foolsの見出しである。これはもちろん、嘘をついても良いというApril Foolの慣習をもじり、可決の見通しもなく、事実上同じ内容の提案を繰り返し、与党も内閣もまとめられない首相、混乱を解消する意欲もなく造反を繰り返す与党議員、やはり分裂し、有効な代案を出せない野党、の全てをfools（愚か者、道化）になぞらえて批判するフレーズで、同時に、現実離れた議論を繰り返している、これが現実とは信じたくない、という不満や失望をうまく表しているように思えた。同日の*The Daily Telegraph*の一面では、May threatens elections as MPs hit stalemate. として、首相が解散総選挙をちらつかせて議員達（Members of Parliament）を恫喝していると報じていた。Stalemateはチェスの用語で「手詰まり」（A position in which the player whose turn it is to move has no allowable move open to him, but has not his king in check. [OED]）だが、一般的に「行き詰まり、膠着状態」の意味で使われる。現実には、May 前首

相は解散総選挙に打って出られず、5月24日に退任を表明せざるを得なくなったのは、周知のとおりである。

3月31日付の*The Sunday Times*には、How Japan must pity the Land of the Setting Sun という記事が寄稿されていた。「桜の季節に東京にいと3つのことが思い起こされる」という書き出しに魅かれて読み始めたが、Brexit looks like a chronic identity crisis when viewed from Tokyo という副題のとおり、ロンドンも東京も春は美しいのに、日本と比べてイギリスは政治が不安定であることを述べていた。両国の政治状況の違いを、移民受け入れの規模の違いに帰すという論じ方に関しては、問題はもっと複雑であろうし、日本を比較の対象として持ち上げるのも安易に過ぎると考えるが、このような見方もあるのかと思わせられるものではあった。

7月24日に就任したBoris Johnson 首相の下、前政権の閣僚の多くが更迭され、内閣は新首相の方針の支持者で固められた。各紙は、purge（粛清）を始め、carnage, massacre, bloodbath（殺戮、大虐殺、血の海）や ripped apart（引き裂かれた）といった、民主主義国家の政権交代にはそぐわない強烈な言葉で組閣を報じ、今回の政変の衝撃の大きさが窺われた。英政府は離脱に向けて強硬な姿勢を強め、no-deal Brexitが実現してしまうことへの危機感が国内外で高まっているようだ。離脱がいつになるにしろ、それまでには、桜や街路樹の葉は色付き、散っていくのだろうが、Brexitを巡る情勢に関しては、世界経済に対する影響や、旅行者にとっての関心事であるポンド相場だけでなく、各種報道の英語表現にも引き続き注目していきたい。

（ひろた あつひこ・京都大学教授）